

D. H. ロレンスと仏教との関わりについて^{*}

— カタルシスと涅槃 —

On an Unexpected Analogy
between D. H. Lawrence and Buddhism
— 'Catharsis' and 'Nirvana' as Their Key Terms —

北 崎 契 縁

1. 『チャタレイ夫人の恋人』との出会い

まずロレンスという作家の簡単な紹介から始めます。おそらくみなさんの年齢から考えまして、ロレンスと言えば、『チャタレイ夫人の恋人』という作品の名前が浮かんでこないでしょうか。ロレンスと言えば『チャタレイ夫人の恋人』、『チャタレイ夫人の恋人』と言えばロレンス、というくらいに我が国ではその名がよく知られている作家のことであります。今頷いてくださった方々を見ておりますと、なんとなく年齢がわかり、従ってある種の懐かしさを覚えます。と言いますのは、私のような世代の人間は、先のようなロレンス観を、そうですね、高校あるいは大学時代から（あるいはもっと以前からからも知りませんが）ずっと抱いて育った世代ではないかと考えるからです。最近もこの『チャタレイ夫人の恋人』の作品研究ということで、ここに持ってきております研究書¹⁾に論文を書きましたが、この作品と私自身との出会いはすでに半世紀前にあったことに改めて気づき、妙な感慨を覚えたものでした。と言いますのは、1950年つまり昭和25年に有名な『チャタレイ夫人の恋人』裁判が日本で始まった年に実は私は小学校に入学しているのです。（今頷いてくださった方々はおそらく私など

(*このテーマは、昨年開講された大阪市民開放講座で講義したものである。本来なら文章体書き改めるべきであるが、口語体のほうが当日の雰囲気や筆者の思いがよく伝わると考え、地の文は敢えてそのまま掲載することとした。)

と同年代の方々であると推察いたします。) 戦後ロレンスが日本に改めて紹介されたのは(戦前にも紹介されていましたが)、幸か不幸か、『チャタレイ夫人の恋人』が初めてでした。そしてであろうことか、学校生活の最初の年に、猥褻かどうかでこの作品が日本中を沸かせ、例のPTAまで巻き込んで約七年にもわたる論争の口火を切ったのでした³⁾。以上のような次第で、半世紀後に、この作品について私自身が論文を書くというのも何か深い因縁を感じました。

結局この作品は「猥褻文書」ということで最高裁判所から「有罪」の判決を受けそのまま今日に至っております。具体的には訳者の伊藤整と出版社の小山久二郎にそれ相当の罰金が科せられました。そうした発禁処分から漸く半世紀経過した1996年に子息である伊藤礼氏によって『完訳 チャタレイ夫人の恋人⁴⁾』として蘇りました。いわゆる猥褻箇所⁵⁾の削除は見事に蘇り、またかなりの誤訳も訂正されて大変読みやすくなりました。先ほどふれました我々のロレンス研究も、この伊藤氏の成果を大いに参考にさせていただきました。900頁にもなるこの大部の論集を作り上げるのも大変でしたが、我々の世界では出版された論集・書籍・翻訳などに対して「書評」というこれまた厳しい関門が待ち受けています。日本ロレンス協会というところから出ております『D. H. ロレンス研究』という機関誌、したがって仲間内が適当にやりくりしていると受け取られても仕方がないのですが、その機関誌で二人の評者が、我々の研究書に対して書評をしてくれております。その中で河野哲二⁵⁾氏の指摘が今日の私のテーマに関係のある発言をしてくれております。要するに『チャタレイ夫人の恋人』という作品は本来的には「悲劇」的な作品で、きまじめな性道徳の追求が唯一のテーマのように受け取られているが、実は、喜劇的な要素、あるいは笑いの要素が間違いなく含まれていることを、私自身は指摘しましたし、他に二人の研究者も指摘しております。そのような新しい『チャタレイ夫人の恋人』像が、河野氏は今後の大きな論点になってくるのではと、我々三人の姿勢を後押ししてくれているわけです。

そこで『チャタレイ夫人の恋人』から「喜劇的」といえる箇所を少し引

用してみます。有名な第十五章に見られます土砂降りの雨の中で踊るコニーの様子とその後近くの小屋に入り、濡れた体を乾かしているときにメラーズがコニーに向かって喋る言葉遣いに注目してください。

彼女は扉を開けて、激しい雨足を眺めた。雨は鋼鉄の幕のようだった。ふいに彼女は雨の中に飛び出して、駆け回りたくなった。彼女は立ち上がって手早く靴下を脱いだ。それから上衣と下着を取った。それを彼は息を殺して見ていた。彼女が動くにつれて強く尖った動物的な乳房も揺れ動いた。緑の光の中で彼女のからだは象牙色に見えた。彼女はまたゴム靴をつっかけ、短い野性的な笑い声をあげ、激しい雨に胸をはり、腕を上げ、ずっと昔ドレスデンで習ったリズムダンスの動作をしながら雨に叩かれて駆けだした。……

「あなたのように美しい尻をした女はいない」

「あなたがここから糞をしても、ここから小便をしても、あなたのように美しい尻をした女はいない」(吉田健一訳⁶⁾)

「おめえがここから糞をしたり小便をしたりするのがいいんだ。糞も小便も出来ないような女に用はない」

コニーは我慢できなくなって突然大きな声で笑い出した。(伊藤礼訳⁷⁾)

このような表現について、吉田健一は、メラーズがコニーを賛美しているのであるとコメントしています。というのは、人間の体に不潔なところはどこにもなく、それだけで完全であるというギリシア人にとっては当たり前前の捉え方に吉田は全面的に賛同しているからです。しかし故意かどうかは分かりませんが、吉田は「コニーは我慢できなくなって突然大きな声で笑い出した」の部分については何にもコメントしていません。実は私は、この部分にこそロレンスの喜劇的要素が明確に出ていると考えたのです。この雨の中の交わりの場面は、いかにも世の紳士淑女の鬢鬢を買う格好の箇所、これこそ猥褻だとの烙印を押される一番の箇所の一つだと思われます。しかし、このような場面で彼女が突然笑い出すのにはそれなりの意

味があるのです。チャタレイ卿という夫の名前が示しますように、彼女は貴族階級の奥方として何不自由ないはずの生活を保障されているのです。もっとも夫クリフォードは第一次大戦で負傷し、半身不随となり、性の営みすら出来なくなっております。元々、といっても特に18世紀から19世紀の特徴として、イギリスの上流階級の人々というのは「恋愛」という観念に囚われ、また上半身は美しいが下半身は汚いといった「観念」に囚われやすいという特徴があります。コニーはスコットランド出身の健康的な女性として登場していますが、先に述べましたような夫との結婚生活でいつの間にか様々な「観念の奴隷」となってしまっていたのです。特に「上半身は美しいが下半身は汚い」という「観念」にがんじがらめになっていた彼女が、「おめえがここから糞をしたり小便をしたりするのがいいんだ。糞も小便も出来ないような女に用はない」というようなことをこの地方の訛そのままに喋る男メラーズの言葉を聞いてハット気づいたのではないのでしょうか。つまり今までは様々な「観念の奴隷」になっていた自分に彼女は気づき、その呪縛から「解放されてありのままの自分に気づいた」ときに思わず出た「笑い」ではないかと思うのです。ともあれ、彼女はこの「笑い」によって自らの精神の平衡・バランスを取り戻すことが出来たのです。(また小屋に入る前、雨の中に飛び出したときのコニーがすでに「短い野性的な笑い声」をたてていたことを読者は想起させられます。)

ともあれ、コニーが体験したこの「平衡・バランス感覚」はギリシアの時代から「カタルシス」とも呼ばれてきました。カタルシスについて『広辞苑』にも次のような説明があります。

【katharsis ギリシア】(浄化・排泄の意)

- ①古代ギリシアの医学で、病的な体液を体外へ排出すること。瀉血(しゃけつ。)
- ②オルフェウス教・ピタゴラス学派・エンペドクレスなどにおける、罪からの魂の浄きよめ。
- ③アリストテレスは悲劇の目的をパトス(苦しみの感情)の浄化にあるとした。最も一般的な理解では、悲劇を見て涙をながしたり恐怖を味わったりすることで心の中のしこりを浄化するという意味。

④精神分析の用語。抑圧されて無意識の中にとどまっていた精神的外傷によるしこりを、言語・行為または情動として外部に表出することによって消散させようとする精神療法の技術。浄化法。

特に①と③の説明にある悲劇と喜劇の密接な関係を実に懇切丁寧に教えてくれるのが、先ほど触れました吉田健一とはその批評姿勢が対照的に違う、福田恒存の芸術論であります。福田の芸術論でも特に重要と思われる「カタルシス」についての説明の箇所を次に少し見てみたいと思います。

ギリシアの演劇はディオニュソス祭礼のディテュランポス合唱歌から生まれました。ディオニュソスというのは本来はギリシアの神ではなく、もとは北方の蛮族の生成神であって、ギリシア本土に侵入し、元来アポロの明晰をこのむギリシア人たちはその騷擾（そうぞう）と猥雑とに抵抗したのですが、たちまちのうちに全土を席卷し、いたるところでディオニュソスの祭儀が行われるようになりました。生成神とは、すなわち、たいていの原始民族の伝説に見いだされる年季交替の神であります。その祭儀は古き年の死と新しき年のよみがえりとを、葬送と生の讃歌とをめぐって行われました。まず人々は老いたる年の王の滅び行く過程を、その反抗と苦悶とを演じる。そして最後に冬がやってきてそれは完全に生命力を失い、萎えはて、死の静寂に終わる。そのとたんに新しき年の若々しい王が立ち上がり、活気と豊穡と生殖と騷擾のうちに踊り狂うのであります。⁸⁾

悲劇と喜劇（喜びの劇）とがいかに密接につながっているかをこれほど端的に明示した指摘に私は今まで出会ったことはありません。しかも単なる演劇上の差異だけにとどまらず、福田の指摘は、「劇」の有り様が実は私たちの肉体の生理機能の有様とも密接に繋がっている点についているところにあります。あるいは、古き年の死と新しき年のよみがえりから連想されることは、例えば、この宇宙の営みにも通じて、朝が来てやがて夕べを迎えることによって、古い肉体は死にやがて翌朝蘇るという誰もが体験

している事象にも通じております。(ある禅の高僧が、毎朝目が覚めると「はい、今日もまた生まれました」と繰り返しの毎日を送っておられたということを知ったことがあります。高僧の心境はまさに毎日が再生の、つまり毎日が日々新しい世界との出会いであったという点にあると思います。)

私は、最近ある雑誌で⁹⁾‘Mannerism’ (「マニエリスム: 美術史上、ルネサンスからバロックへ移行する時期の誇張の多い技巧の様式。ティントレット・エル＝グレコなどに見られる。文学史上、同時期に見られる技巧偏重の傾向についてもいう。」あるいは「マンネリズム: 一定の技法や形式を反復慣用し、固定した型にはまって独創性と新鮮さを失うようになる傾向。マナリズム。」「広辞苑」)の勧めを実行している先生がおられることを知りました。一般にはマンネリズムは上記ですでに説明しましたように「一定のやり方が繰り返されるだけで、新鮮味がないこと」(『新明解国語辞典』)とネガティブに捕らえられていますが、この先生はマンネリズムの「効用」に気づかれたのであります。子供の頃から本の虫で、体育会系の人間を馬鹿にしてきた先生がある本を読んだことがきっかけで、「ある晩、こっそりと家を抜け出し、だらだらと近所を一周した。身体を動かすことが、実に気持ち良いものだと、初めて知った」と告白されています。それからは水泳教室に通い、習慣的に走るようになったというのです。そうして達した一つの結論が「人に勝たなくても、記録を伸ばさなくても、身体を動かすことは楽しい。惰性のように繰り返して、決して飽きることはない。これは人生を楽しむ極意ではないか」とまで言われるまでになりました。ここには心身ともにいつも「ゼロの状態」に置いておくことから生まれる一種の「カタルシス」が感じられます。従ってマンネリズムとは「一定のやり方が繰り返されることで、絶えず蘇りの生き方をすること」という風にも読み替えることが出来のではないのでしょうか。

ともあれ、福田のカタルシス論の根底には以上のような何気ない、だからこそ我々が見逃しがちな実に簡単明瞭な人間の生き方のヒントが詰まっているような気がするのです。

このカタルシスと芸術との関係について福田はこう言っています。

芸術はカタルシスであり、カタルシスの本質は繰り返しにある。そ

れは肺臓の呼吸のように、また心臓や脈拍の鼓動のように、一定のリズムに支配されて繰り返しを行います。肉体の生理ばかりではない、情熱も観念も思想もこの原則から外れるものではない。リズムを持たない思想は呼吸や脈拍と適合せず¹⁰⁾ 関連しない思想は死んだ思想であり、思想の名にも値しません。

芸術とよく似たものに「スポーツ」がありますが、スポーツは「繰り返しが無い」つまり無限直線上の運動にしかすぎないもので、ただ「進歩と速度との幻影に憑かれ、人間の生理的限界を無視してまで、呼吸と脈拍とを早めようと狂気のごとく努力しているのです」と、スポーツに象徴される現代文明を福田は批判しております。

2. 仏教とカタルシス

こちらあたりで少し仏教の立場を導入し、仏教の目標がカタルシスを目指す芸術と似通っている点を取りだしてみたいと思います。我が国で著名な仏教学者の玉城康四郎氏は「主体性の回復」という主題で次のように述べています。「仏教における主体者の目標というのは、自己自身の回復、主体性そのものの回復ではないのでありまして、主体性を貫く永遠の生命に目覚めるということであります¹¹⁾」。ここで言われている永遠の生命は、自分が自分がという「自我意識」ではなく、いわば「ゼロなる状態にある自己」こそが本当の生命=永遠の生命であるということだと思います。つまり「心臓は正しく、しかも力強く脈打ち、肺臓は静かに、しかも深く呼吸し、星辰の運行や樹木の生理と合一して、まったく無為に横たわりながら永遠を感受する瞬間」と、福田がカタルシスの説明で試みている内容と殆ど同一であると私は考えたいのです。このような「永遠の生命」に目覚めると、人間はどのように変わるのででしょうか。再び福田の芸術論から引用してみます。

芸術家は作品を造ると同時に、作品によって造られるということが

しばしばいわれる。が、それはカタルシスによってゼロに復帰することを意味するのでなければなりません。じじつは誤解されているようだ。それはなにものかになることだとおもわれている。なにものでもなくなることであるのに。精神は変わる必要もなければ、変わることもできない。それはただ強壯になるだけであります。芸術の効用はそれ以外にありはしない。強壯になり健康になった精神が、そのあとでなにをするかは、およそ芸術の本質とは無縁のことなのです。その点では、芸術はあくまで無用であり、無目的であり、無償のものであります。あたかも医者とはただ病気を治すのが目的であって、その肉体がなにに使用されるかは問題にしないように¹²⁾。

このような考え方は、例えば、仏教では「我」は否定され「無我」が主張されましたが、人間の「心」や「識」は否定されるというよりも「昇華され・浄化されるべきもの」(カタルシスされるべきもの)と考えられているのに似ております。もちろんインドの仏教では「無我」と「浄識」は相互補完的な関係にあったわけですが、日本人はどちらかというとな無我の観念よりも「無心」の境地に次第に価値を置くようになったと言えます。例えば、夏目漱石の「則天去私」(夏目漱石の最晩年のことば。小さな私を去って自然にゆだねて生きること。宗教的な悟りを意味すると考えられている。また、創作上、作家の小主観を扶まない無私の芸術を意味したものだとする見方もある。)や、小林秀雄の「無私の精神」も一種の解脱(enlightenment)としての「無心」の境地を指していると言えます。もちろんこの場合の「無心」ということは心が無いことではないし、心を空にすることでもありません。「心が初心であり続けること」「いつでも自然や他者と共鳴しつづけることのできる心の状態」を指していつていることは言うまでもありません。このように仏教、殊に日本仏教という「宗教」を考えて参りますと、「無用・無目的・無償」を説く福田の「芸術」との距離は大変近い、と感じるのは私だけでしょうか。

ここでもう一度作品に戻りますが、『チャタレイ夫人の恋人』という作品が今日再評価されるとしたら、「芸術」として評価されてこそ本物の芸

術作品と言えるでしょう。そしてその評価の基準となるのが「カタルシス」が、つまり「自然」な行為なり、やりとりが作品の中に存在するかどうか、またそのような作品を読んだ読者がカタルシスを追体験できるかどうかにかかっていると言えるのではないのでしょうか。

ところで、人間と人間とを、また男と女とを結びつける根底には「性の力」が大きく働いていることは誰しも否定できないと思います。『チャタレイ夫人の恋人』では、少なくとも正式な夫婦であるクリフォードとコニーとの間ではなく、コニーと森番のメラーズとの間に成立する男女の結びつきにこそ、読者は誰もが「カタルシス」を感じるのではないのでしょうか。逆に、カタルシスとは反対の「目的」のためには手段を選ばず、といったエゴイズム剥き出しの夫婦関係がクリフォードとコニーにはどうしても目立つように描写されているのです。先ほどメラーズとの性の交わりとその後のカタルシスについて触れましたが、一つだけ、クリフォードとコニーとの間に見られる不毛の夫婦愛、したがってカタルシスなど微塵も感じられず、却っていつまでも燃焼しきらない不満・不安そして一種の恐怖感すら助長するような、そんな衝撃をコニーのみならず読者にも与えるような戦慄する場面がありますので、そこを少し引用してみたいと思います。(しかもここには今日の科学の現状をも予告するような冷酷無比な人間性が感じられます。例えば、クローンの問題・臓器移植の問題などもクリフォードの冷たい主張とどこかで繋がっているように思われます。)

「子供をもてないのは残念ですわ」と彼女が言った。

彼は大きく見開かれた薄青い目で彼女をじっと見た。

「あなたがだれかほかの男の子どもを産んでくれると、その方がいいんだが」と彼は言った。「もしも僕らが、それをラグビー邸で育てれば、それは僕らの子供であり、うちの子供なのだ。僕は父性というものにはあまり重点を置いていない。もしも僕らに育てられる子供があれば、それは僕らに属するものだし、それでうまく物事は進んでゆくだろうと思う。どうだろう、考えてみる気にならないかね?」

コニーはとうとう顔を上げて彼を眺めた。子供、彼女の子供は、彼

にとってはただ《それ》なのだ、それ……それ……それ！

「でもその、ほかの男というのは？」と彼女がたずねた。

「それが気になるかね？　そういうことが僕らの生活をそんなに深く左右するだろうか？　何でもありゃしないじゃないか？　われわれの生活のなかのそういう行為やそういうつながりは、少しも実生活の重要なものになりはしないと思うね。過ぎ去ってしまうのだ。」¹³⁾

このようなクリフォードの弁舌のすぐ後に、「コニーは坐って聞いていたが、びっくりするとともに恐怖を覚えた」とありますが、クリフォードの言説には人間性を無視した冷酷無比な態度がありありと具わっております。ことにコニーの心に突き刺さった鋭い棘は、夫クリフォードが子供を《それ》（英語ではitと書かれています）と呼んで、まるっきり子供を人間扱いしていない点にあります。このような非人間的な人物を創造したロレンスは、この当時からすでに今日によく言えば「進んだ科学の世界」を、言葉を換えて言えば「科学の非人間性」をすでに予感していたと思われます。少し脱線しますが、今日話題となっている「臓器移植」はまさに《それ》の世界に当てはまると思います。欧米のように根付かない日本の臓器移植の現状はまだまだわれわれ日本人が人の命を、あるいは臓器を《それ》つまり「もの・物質」としては受け取り難いという日本人的な心性を物語っているように思われてなりません。「脳死」「心臓死」ということを論議する前に、人の命を「もの化できない」我々日本人の精神が厳として存在していることにもう少し注意を向けてもよいではないでしょうか。そしてそのような事態・事実こそ、逆に実に大切なことだと私は考えるのです。実はロレンスというイギリスの作家も私たち日本人の心性に大変近いものを持っていたように思うのです。臓器移植とは直接関係はありませんが、その根底における考え方として日本人とよく似た考え方だなと思われる箇所をロレンスの作品から引いてみたいと思います。

例えば、中期の代表作品で、先ほども少し触れました今世紀最高傑作の一つだと言われている『恋する女』という作品があります。バーキンとアーシュラという男女と、ジェラルドとグドランという男女二組のあり方を対

照的な角度から描いた実に興味深い小説ですが、今はその内容には立ち入る余裕はありません。ただ一つ印象的な場面として考えてみたいのは、教育視学官のパーキンと小学校の女教師であるアーシュラが、様々な紆余曲折を経て結婚に至るわけでありますが、この二人は一般のイギリス人とはちがっております。これから新婚生活に入っていこうとする前に、二人は家具の一つである「椅子」を手に入れる計画を立てます。

町に昔からある市場で、毎週月曜日の午後には蚤の市が開かれる。アーシュラとパーキンは、ある日の午後、ぶらりとそこに出かけた。家具のことは前から話し合っていて、丸石の舗道に山と積まれたがらくたのなかに、自分たちが買いたい半端物がなにかないか見に行ったのである。……

「見てごらん」とパーキンが言った。「きれいな椅子があるじゃないか」

「まあ、いいわ」とアーシュラは声を上げた。「すてきだわ」それはおそらく樺の木であろうが、ごく並の木でできた椅子だったが、なんともいえぬ優雅で繊細な作りで、それが薄汚れた舗道に立っているのを見ると、涙が出そうになるほどであった。形は四角で、ほっそりした線がいかにも純である。背に四本の短い木の線があって、それがアーシュラにハーブの弦を連想させた。

「これは元は金がかぶせてあって——シートは籐だったんだね。だれかがこの木のシートを釘付けにしてしまったんだ。ごらん、ここに金の下塗りの赤がちょっと残ってるだろう。ほかはいったいに黒だが、使い込んで艶が出ている箇所があるね。線が繊細に統一されている、そこがなんとも言えないところさ。まあ、見たまえ、線のこの走り具合を、交わったり遠のいたりしているのを。むろん、この木のシートはいけなさい——籐だと軽さも申し分ないし、引き締まったま¹⁵⁾とまりがあるんだが、それを打ち壊している。でも、ぼくは気に入って——」

結局買った椅子は、たまたま居合わせた若い男女に譲ることになります

が、ここで大切なことは、買った「椅子」に対する確かな鑑賞眼とともに（このあたりは骨董品の大好きな、またそれに対する鑑識眼のあるイギリス人らしい箇所です）、この引用の少し先でパーキンが約100年前のオースティンの時代を回顧し、過去と現在を比較しているその視点であります。「『物質的になる余裕があったのさ』とパーキンが言った。『あの頃は他のなにかになる力があったからだ。その力をわれわれは持っていないのだ。われわれが物質的なのは他のどんなものにもなる力がないからなんだ。どんなにやってみたとろで、われわれには物質主義以外はなにも成し遂げられないのだ。機械主義という物質主義の核心以外のものはね』」（p.1020）とありますように、まさに「もの化」してすべてのものを見ようとする現在のわれわれ日本人のある一面をも見事についております。しかし、同時に二人は今買ったばかりの「椅子」を「過去」に囚われる、あるいは「所有物」に囚われる原因になると言って、捨てていこうとするのであります。このあたりの議論を読んでいますと、「宵越しの銭は持たない」（宵越しの銭は持たぬ： その日に得た収入はその日のうちに使いはたす。将来のことをくよくよ考えない、さっぱりとした江戸っ子の気風を表すことば。）としたわれわれ日本人の性格を彷彿とさせて親近感を感じるのは、私だけではないと思いますが如何でしょうか。このような二人が「歴史性と定住」に縛られないで、人間の「関係性」によって生きようと決心しますのも、我々日本人には何となく懐かしく感じるのであります。¹⁶⁾あらゆる人間関係、例えば「結婚」というものを「縁がありまして・結構なご縁で」などと今日でも私たちが何気なく遣っている表現に実に近いものを感じるからであります。縁があると言うことは、ある一つのこと「執着しない」生き方を暗示しているのであります。もちろん実際には一度は「執着」することによって執着の無意味さ・むなしさを体得し、そのようにして徐々に人間は「カタルシス」つまり「心の浄化」を経験していくのではないのでしょうか。『恋する女』という作品に伺われる「一服の清涼剤」とも言えるカタルシスとしての一場面をご紹介した次第です。

2. 涅槃とカタルシス

そこで最後にもう一カ所ロレンスから引用したいのですが、その前に本日のタイトルが「ロレンスと仏教との関わりについて」ということでしたので、仏教の鍵概念であります「涅槃」ということについて少し触れておきたいと思います。実はこの「涅槃」と「カタルシス」とが非常によく似た考え方でして、そのあたりを考慮に入れながら考えてみたいと思います。もちろん今までにすでにロレンスはもちろんのこと、仏教についても少しずつ言及してまいりましたので、ロレンスという作家と仏教とがどこかで繋がっていることは臆気ながらおわかりになっていただけたと期待しておりますが、やはり、ロレンス自身が「仏教」についてどう考えていたかに触れないと痒いところに手が届かないといったもどかしさが皆様の中に残っているのではないかと考えます。実はロレンスが仏教的な考え方をする人であるということは私がこの作家を研究しだした時からずっと感じていたことでありました。また事実私の友人で当初からロレンスと仏教（と言いましても、彼の場合は真言密教的な立場からの研究でしたが）を正面から研究している人もいます。しかし、私がロレンスが仏教について、一方では嫌悪感を示しながら、同時に実は深い理解を持った作家だということ直感いたしましたのは、次のような手紙の一節に出会ったときからでした。

Nirvana is all right if you get at it right. It is a sort of all-inclusive state, and therefore includes sorrow, does *not* supersede sorrow: no such impertinence. And *your* Nirvana is too much a one-man show: leads inevitably to navel-contemplation. True Nirvana ia a flowering tree whose roots are passion and desire and hate and love. Your Nirvana is a cut blossom. ...¹⁷⁾

これは1921年5月2日にドイツのバーデン・バーデンからアメリカ人の友人で画家で仏教学者であったアール・ブルースター（1878-1945）と

いう人に宛てたロレンスの手紙の一節です。その意味を訳してみますと「涅槃は君が正しく学ば素晴らしい考え方だ。言ってみれば涅槃とは一種の包括的な状態のことであり、従って悲しみも全体の一部として取り込みこそすれ、破棄することはしないのだ。決してそのような見当違いはしない。ところが君が目指している涅槃はあまりにも一人芝居が勝ちすぎている。当然の結果として現実逃避の瞑想に陥ってしまう。本当の涅槃とは、花を咲かせている一本の木のようなもので、目に見えないその根っこの部分では、情熱と欲望が、憎悪や愛情がその木を育てる大地そのもののような働きをしながら存在しているのだ。君の涅槃は言ってみれば、切り花のようなものだ。……」

親鸞教徒であります私などはこの手紙を読みましたとき、即座に「煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり」という有名な一節を思い起こしました。そうしてその後何年かを経て、有名な仏教学者のひろさちや師の「涅槃」についての記事を読みましたとき、ロレンスの、また親鸞の「涅槃観」がずっと繋がっていったことをよく覚えております。ひろ師は涅槃について実に斬新な解釈をされております。師の立場は「現実の人生において直面する問題を、一つ一つ解決していくのが仏教である。わたしはそう考えている。」と明確に自己の立場を表明されております。「人生の応用問題を毎日毎日解いていくのが仏教者の態度である」と教えていただいた米沢英雄という福井の内科医の先生にもお出会いました。まあそれはともかく、ひろ師の「涅槃」についてご紹介しておきます。

“涅槃”という語は、サンスクリット語の“ニルヴァーナ”パーリ語だと“ニッバーナ”を音訳した語である。それは、(煩惱の)火の消えた状態を意味する。われわれの心のうちにあってメラメラと燃えている「貪(むさぼり)・瞋(いかり)・癡(おろかさ)」の煩惱、その火を消した状態が「涅槃」である。仏教はその「涅槃」を理想とする。

ところで、ちょっと注意しておいてほしいのは、煩惱の火を消すといっても、水をぶっかけるようなことをしてはいけない。勢いよく燃

えている火に水をぶっかけると、灰神楽が立つ。火は消えるかも知れないが、あれは最低の消し方だ。仏教ではあんな消し方はすすめはしない。

烈火のごとく怒っている人がいる。「まあ、恠えて恠えて……」と、あなたがその人に言う。あるいは、怒ってはならぬと命ずる。かりにその人がその場で収まっても、その火は彼のうちでくすぶり続けているのだ。怒りを鎮めるために無理をすると、のちのちまで精神が落ち着かない。そんなことはよくある。

それよりは、むしろ怒りを爆発させて、しばらく荒れ狂ったほうがよい。そうすれば、あんがいあとは落ち着くものだ。

悲しみだって同じである。お葬式の時は、思い切り泣いたほうがよい。涙を恠えていると、かえってのちのちまで悔恨が残る。¹⁸⁾……

仏教は決して欲望をなくせとは教えていないのであります。欲望の抑制と、その時々¹⁾の腹立ちの鎮めを教えているのであります。というよりは人間に欲望をなくせとか、腹立ちを断ち切つてしまえということは、元々出来ない相談なのです。しかし「涅槃」というのは「涅槃寂靜」とも表現されますようにやはり人間にとっては理想の境地であります。誰しも心安らかに日暮をしたいと念じております。「現実の人生において直面する問題を、一つ一つ解決していくのが仏教である」とか「人生の応用問題を毎日毎日解いていくのが仏教者の態度である」というのは、そういった人間の実存に対する深い理解と、だからこそ仏教の教える深い知恵である「涅槃」を絶えず鏡として生きていく必要があると教えられているのであります。

ロレンスという作家は、「本当の涅槃とは、花を咲かせている一本の木のようなもので、目に見えないその根この部分では、情熱と欲望が、憎悪や愛情がその木を育てる大地そのもののような働きをしながら存在しているのだ」と手紙しましたように、実に自分に忠実に生きた人でした。例えばこんな手紙が残っております。

My great religion is a belief in the blood, and the flesh, as

being wiser than the intellect. We can go wrong in our minds. But what our blood feels and believes and says, is always true. ……The real way of living is to answer to one's wants. Not 'I want to light up with my intelligence as many things as possible, but 'For the living of my full flame I want that liberty, I want that woman, I want that pound of peaches, I want to go to sleep, I want to go to the pub and have a good time, I want to look a beastly swell today, I want to kiss that girl, I want to insult that man.' Instead of that, all these wants, which are there whether-or-not, are utterly ignored, and we talk about some sort of ideas.¹⁹⁾

ここでは、観念論に陥りがちなイギリス人をロレンスは非難しております。仏教を勉強していたアール・ブルースターの「涅槃観」を非難していたときのロレンスと同じ口調です。中でも 'I want that liberty, I want that woman, I want that pound of peaches, I want to go to sleep, I want to go to the pub and have a good time, I want to look a beastly swell today, I want to kiss that girl, I want to insult that man.' (「私はあの自由が欲しい、私はあの女が欲しい、あの桃が欲しい、私は眠りたい、私はパブへ行って楽しみたい、私は鼻持ちならないキザ野郎になりたい、あの子にキスをしたい、私はあの男を侮辱してやりたい」)と正直にそして堂々と自分の欲望・腹立ちを表明しているところに、裏を返せば、ロレンスという作家の自己管理の方法の秘密が潜んでいるようにも思えるのであります。それはまさに、ひろ師が指摘されています「涅槃」の本来的な捉え方、あるいは実践をロレンス自身が期せずして行っている証拠になると思われるのです。ここに、仏教徒の取るべき態度にも十分通じるものをロレンスは持っていたと言える貴重な資料があると私は考えております。

以上、ロレンスと仏教との共通点を「涅槃」という概念を中心に見て参りましたが、最後に彼の仏教的な見方をさらにその処女作にまで遡って、

少し追加的にその例を加えておきたいと思います。

4. 『白孔雀』論への一つの疑問

ロレンスが最愛の母に死に別れ、25歳の1月にハイネマン社から出版しました処女作『白孔雀』(1911年)から引用したいと思います。この場面について、昔お世話になりました甲斐貞信先生は「そこには、神も人も動植物もない、天地の万物が一体となって、アナブルの死を嘆き悲しんでいる。さながらに、沙羅双樹の下、入寂の釈迦のまわりに集まって、生きとし生ける禽獣中魚の類までが慟哭したという、あの荘厳な大涅槃像の場面そのままではないか。」と指摘されました。私も長らくその通りだと思っておりましたが、最近また読み直してみまして、いわゆる私たちが知っている釈迦の涅槃図のイメージとは少し違うのではないかと思うようになったのです。引用の箇所をよくご覧ください。

彼は私たちのグレイミードの墓地のブナの下に埋められることとなった。彼の未亡人がそうしてくれと言ったのだった。……

早春の壮麗な朝だった。私は丘の中腹を下ってくる葬列を見ようと林の中から見張っていた。天上の空気は雲雀の鳴き声に織りなされ、私を取り囲む世界は夏の近づくのを感じて身震いしていた。やちやなぎの傍らに、若い青白いアネモネが頭をもたげ、多分暑い太陽の熱を受けてか、新しい花びらをほころばせ、明るく燃え立っていた。一種の戦きとよみがえりが、あらゆる場所にひそんでいた。それは懐妊した女が感ずるにちがいないようなものだった。……

葬列の先触れが来るまで——先触れが、嘆き悲しみ、永遠に悩みながら、明るい空気の中も影のように揺れてくるまで。上がったり下がったり、輪を描いたりしながら、ゆっくりと飛び交うなべげりは、嘆き叫び幅広い翼を悲しみにうち振る。たげりは不意に地面に向かって降りていき、それからまた苦悩と抗議に胸をふるわせて舞い上がる。……なべげりの叫びに応え、たげりの嘆きの声を大きく強くはねかえす

叫びが、慟哭の聲が鳥たちの騒ぎを鎮めた。丘の峠を、背の高い姿勢正しい地主を先頭に、男たちがゆっくり越えてきた。……棺は新しい削りっぱなしの木で作られており、陽光を浴びて輝いている。それを担った男たちは、新しい暖かい榆の木の香りを終生忘れ²¹⁾はしない。

確かにアナブルの未亡人の嘆きと、子供たちの悲しみについて書かれてはいますが、主人公であり語り手であるシリルの目を通してみられたこの場面は、生きとし生けるものが嘆き悲しんだと言われる釈迦の死とは、やはりその実態は異なっていると言わざるを得ないのです。結論を先走って申し上げますと、葬送という悲しみが描かれている一方で、「一種の戦きとよみがえりが、あらゆる場所にひそんでいた。」とありますように、生の絶頂といえますか、「夏」の季節が巡ってきて、その季節の変化に敏感に対応している生きとし生けるものの姿が明確に描かれているという事実です。「それは懐妊した女が感ずるにちがいないようなものだった」と同じ発想です。つまり人間以外の動植物は今、命の最盛期を迎えて、その暖かさに酔っているのです。しかし動植物の中にも、例えば「死」ということに敏感な動物、この場合は「鳥」がいます。それが「たげり」という鳥です。この鳥はギリシアの昔から「悲報を伝達する使者・先駆け」として捉えられてきました。「なべげりの叫びにんえ、たげりの嘆きの声を大きく強くはねかえす叫びが、慟哭の聲が鳥たちの騒ぎを鎮めた。」とありますように、たげりはここでは大きな働きをしております。そしてこれ以降、あらゆる動物たちはアナブルの死の悲しみと一体化し、悲しみに沈んでいきます。

まあ以上のことを纏めますと、ロレンスは「生」にも「死」にも固執しない・執着しない動植物に具わったある種の「深い知恵」のようなものもしっかりと見極めていたのではないかと思います。「諸法実相」つまり「あらゆるものは真実である、あるがままが最高」、ということロレンスは知っていたのではないかと思うのです。換言すれば、夏が近づけば、生あるものは命の燃え上がりに自ずと反応します。しかし、不幸にして突然の「死」にもしっかりと一体化し・見極めようとしているのです。いわば

自然の営みそのままに生きているのが様々な生き物の有り様なのです。生と死は一体であるとも言われますように、ここの場面はそのことを伝えようとしているであります。

以上、当初の題目「D.H.ロレンスと仏教との関わりについて」のとおり、ロレンスというイギリス人作家、それも『チャタレイ夫人の恋人』という日本人にはなじみ深い作品の原作者が、案外、仏教的な面を持っていた人であったことがお分かりいただけたのではないかと思います。また、そういった面があったからこそ、ロレンス研究者の数、様々な研究論文、またケンブリッジ版の全集、単行本の需要といった面から見て、日本は世界中でもかなりの数を稼いでいる理由の一つになるのではないかと考えております。ひょっとして、日本人のロレンス研究者は自覚しないままに、自らの背負っている仏教的な文化的背景をもってロレンスを学んでいるのかも知れません。

*

最後にお話ししておきたいことは、1993年6月にカナダのオタワ大学で開かれました第5回国際ロレンス学会で発表する機会を得たことがありまして、その成果がたまたまここに持ってきておりますD.H. Lawrence: *The Cosmic Adventure*²²⁾の中に採用されまして掲載されております。内容は「ロレンスと仏教：比較研究、《二つの力》の類似点を巡って」(A Question of "Dual Forces": D. H. Lawrence and Buddhism: A Comparative Approach', pp. 238-249.)ということで発表しましたが、様々な反応がありました。ただ西欧の人たちの仏教観は、どちらかというところ「小乗仏教」的なところが多分にあることにそのとき気づきました。もちろん、私は、「大乘仏教」それも浄土教的な立場からの話をしているつもりだと、切り返しておきましたが、今回の講座を機会に、もう一度通仏教的な立場からも西欧人に話が出来よう勉強し直したいと感じました。²³⁾

注

- 1) 北崎契縁「日本人の『チャタレー卿夫人の恋人』批評——吉田健一と福田恆存」『ロレンス研究——『チャタレー卿夫人の恋人』』(D. H. ロレンス研究会編: 朝日出版社、1998年)、pp. 660-705.
- 2) この年の6月にいわゆる「朝鮮戦争」(大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国とが、第二次大戦後の米・ソの対立を背景として、1950年6月25日衝突し、それぞれアメリカ軍を主体とする国連軍と中国義勇軍の支援のもとに国際紛争にまで発展した戦争。53年7月休戦)が始まっている。
- 3) 伊藤整『裁判 上・下』(晶文社、1997年)
- 4) 伊藤整訳・伊藤礼補訳『完訳 チャタレイ夫人の恋人』(新潮文庫、平成8年)
- 5) 日本ロレンス協会編『D. H. ロレンス研究』第9号(日本ロレンス協会、1999年)、pp. 55-63.
- 6) 吉田健一『吉田健一著作集』第3巻、p. 323.
- 7) 前掲書、pp. 407-411.
- 8) 『福田恆存全集』第2巻、「藝術とはなにか」(文藝春秋、昭和62年)、pp. 628-29.
- 9) *Ashahi Shinbun Weekly AERA* 1999/10. 4号
- 10) 前掲書、p. 638.
- 11) 玉城康四郎『仏教と西洋思想』(法蔵館、昭和60年)、p. 288.
- 12) 「藝術とはなにか」、p. 643.
- 13) 『完訳 チャタレイ夫人の恋人』、pp. 76-77.
- 14) 英語という言葉は、あらゆるものを「もの」と見る名詞中心の捉え方をするに対して、日本語は「こと」を中心に見る動詞を基本とした言語である、という説を翻訳論の立場から唱えている安西徹雄氏の考え方が想起される。参考、安西徹雄、『英語の発想』ちくま学芸文庫、2000)
- 15) 『イギリスⅢ 集英社ギャラリー[世界の文学]4』(1991)に所収の『恋する女たち』、pp. 1018-1028. を参照。
- 16) 建築家の磯崎 新氏は、「ナビゲート21世紀—流行と伝統②」という記事の中で、我々日本人が西欧理解の手がかりとしてきた「時間と空間」とは違う概念、つまり「関係性と距離」が日本には古来よりあったことを強調し、岡本太郎の『縄文土器論』を再評価している。また電腦ネットのバーチャルな世界には《間》だけがあり、私たち日本人にとってははいたって親密な

光景だった、と述べているのが注目される。(『毎日新聞』2000年11月13日、月曜日夕刊「文化 批評と表現」の欄参照。)

- 17) James T. Boulton and Andrew Robertson (eds.), *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. III (Cambridge : Cambridge Univ. Press, 1984), p. 712.
- 18) ひろさちや『わがふるさと浄土』(法蔵館、1990)、pp. 25-28.
- 19) James T. Boulton (ed.), *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. I (Cambridge : Cambridge Univ. Press, 1979), pp. 503-504.
- 20) D. H. ロレンス研究会編「ロレンス研究『白孔雀』論集」(D. H. ロレンス研究会会員一同、1973)、pp. 1-3.
- 21) D. H. Lawrence, *The White Peacock* (ed. by Andrew Robertson) (Cambridge : Cambridge Univ. Press, 1983), pp. 155-58.
- 22) D. H. Lawrence : *The Cosmic Adventure* (eds. by Lawrence B. Gama-che, and Phyllis Paerrakis), (Nepean, Ontario : Borealis Press, 1996), pp. 238-249.
- 23) 21世紀に向けて必要なのは、いわゆるイデオロギーに墮することのない一つの世界観を構築することであるように思われる。例えば、浄土真宗で説く「阿弥陀仏」あるいは「法蔵菩薩」がよくキリスト教の「神」とどうちがうのかということが質問されるが、そのあたりがきちんと整理し説明できれば一つの突破口が出来るのではと考えられる。しかしこれとて、従来からの人間中心主義からは説明できないことはもはや明らかであろう。人間はもちろん、生きとし生けるあらゆるものを含んで、今度は「宇宙」から見る視点が是非とも必要になると思われるからである。このように考えるようになったのは、一つには2000年7月10日付の『毎日新聞』夕刊号に載った「ナビゲート21世紀—地球環境への処方②」という記事であった。その著者松井孝典氏は、地球惑星物理学という専門の立場から、約五百万年前の人類誕生、あるいは六千五百万年前の巨大隕石衝突による地球システムの擾乱(じょうらん)にまで視野を広げ、「生物圏」から「人間圏」へと進んできた人類にとって、21世紀の生き方を見据えた胸のすくような論を展開している。

今ひとつは、つい最近邦訳が出た※マイケル・ベルの『モダニズムと神話』の訳者あとがきで吉村宏一氏が言及している次のような指摘である。「ベルは20世紀後半になって、『神話』はイデオロギーという語に取って代われ、……イデオロギー偏重の批評に対して厳しい批判の矛先を向けている。……ベルの基本的な姿勢は、ある作品が生の一つのあり方を批評と

D. H. ロレンスと仏教との関わりについて

いう形で捉えられて存在しているのであれば、各人はそれぞれ自分の理解に従って率直に理解すればいいのだということになる。つまり、『神話形成的な捉え方とは、読者自身の総合的な体験以外に何ら判断基準を設定しない一つの全体論として作品を徹底的に理解しようとするものである。』また「神話」には「嘘の物語」「基本の物語」という曖昧な二重性があるようだが、ベルはその点を容認しているとも吉村氏は指摘している。先程述べた「法蔵菩薩の神話」と「阿弥陀仏という神話」がここで想起される。要するに、浄土真宗という狭い教団だけに押しとどめておく必然などみじんもないくらいに、この神話を再形成する作業が必要であると筆者はつくづく感じている次第である。（※マイケル・ベル著、吉村宏一/ 杉山泰/ 浅井雅志/ 安尾正秋訳『モダニズムと神話——世界観の時代の思想と文学』松柏社、2000年11月20日）

参考文献

1. 伊藤整 訳・伊藤礼補訳『完訳 チャタレイ夫人の恋人』（新潮文庫、平成8年）
2. 伊藤礼訳『チャタレイ夫人の告白』（新潮文庫、平成11年）
3. 河野哲二『D. H. ロレンスの絵画と文学』（創元社、2000年）
4. 梅本浩志『チャタレイ革命——エロスを虐殺した20世紀』（社会評論社、2000年）

（※「プリンセス・ダイアナは現在の実在のチャタレイ夫人だった。今回この素晴らしい作品『チャタレイ夫人の恋人』を精読してみて、改めて、そしてつくづく、そう思った。ただ一つ違った点がある。それは、チャタレイ夫人が事実上の離婚にまで踏み切り、その限りでは社会と対立しなければならなかったものの、そこまでの限界の中に自らを留めおいたのに反して、ダイアナさんはゴシップ・マスコミや社会的差別主義者や地雷戦争加担者あるいは英国諜報機関などに対して、公然と真っ向から闘った、ということである。」とプリンス・ダイアナとチャタレイ夫人とを結びつけるといふ実に大胆な視点でこの書は始まっている。しかし本書の真の意図は、「エロスを虐殺した20世紀」と副題にもあるように、「物神崇拜」という人間無視の時代をロレンスがこの小説ですでに予言していたことを強調する点にある。またもう一つの力点はチャタレイ判決は違法とした最高裁

判決がいまだに生きている摩訶不思議な「日本」の裁判制度に対する執拗なまでの疑問提示と告発にある。「検閲削除事例を具体的に検証すればするほど最高裁判決のおかしさは歴然としているのだが、どうしてか日本の司法権力はかたくなに自らの誤りを率直に認めて、無罪とはしない。傲慢でさえある。そのため、今日なお訳者の伊藤整は刑事犯罪人である。なぜか。」長らく時事通信社に勤め世界中を駆けめぐった著者らしく、その筆先は冴え渡っていて、読者を飽きさせない。

5. 『広辞苑 第5版: CD-ROM版』(岩波書店、1998年)
6. 『新明解 国語辞典』(三省堂、1997年)
7. 山折哲雄『仏教とは何か』(中央公論社、1999年)
8. D. H. Lawrence, *The Trespasser* (ed. by Elizabeth Mansfield) (Cambridge : Cambridge Univ. Press, 1981)